

小谷野純一著『平安日記の表象』

宮崎 莊平

まずもって、新著『平安日記の表象』の刊行を心からお慶び申し上げる。本書は小谷野純一氏の第三論文集で、『平安後期女流日記の研究』（一九八三、教育出版センター）、『女流日記への視角―更級日記・讃岐典侍日記をめぐって―』（一九九一、笠間書院）に次ぐものである。その間には、『讃

岐典侍日記全評釈』（一九八八、風間書房）、『更級日記全評釈』（一九九六、同）の二大注釈書もあり、日記文学研究の確乎たる成果の積み重ねがある。しかも今回の『平安日記の表象』は、新たな視座と論点を提供するもので、この分野の研究に示される意義は大きい。

さて本書は、『紫式部日記』三篇、『更級日記』三篇、『讃岐典侍日記』四篇、『紫式部集』『源氏物語』各一篇、計十二篇の論文と、『讃岐典侍日記』に関する講演記録一篇とから編成される、まとまりのある論著である。『更級日記』と『讃岐典侍日記』に関する論考は、いずれも著者自らの注釈

による読みを支えとして呈示される重厚な説述であり、『紫式部日記』に関する論考は、師・萩谷朴氏（『紫式部日記全注釈』の著者）の説を踏まえつつも、精細にして新たな考察に基づく論理の展開である。

ところで、書名の「表象」とは、特に定義はなされていないものの、論述の端々から帰納されることから言えば、作品構造にまで視野を及ぼした表現機構ということに収斂されようかと思われる。各作品それぞれの叙述部分の検討と考察を通して得られる表現機構から作品構造を探り、もって作品の論理ないしは特質を捉え論じるところに、著者の立脚点があり、同時に本書の眼目があると窺知されるのである。

まず「紫式部日記の表象（一）」（三）の三論は、いずれも作品叙述の細部に測鉛を深く下ろして表現構造の内実を探るものである。そこに探り当てられる事象は、周到な構想に基づき成されたものではなく、書くという営みによって叙述を

自在に展開していったところに成った、非実録的な本日記の本質であり、さらに私的にして内発的な論理を視野に収めたうえに、作者が自己の内奥に突如引き込まれるところに、繫縛から自己を解き放つ慰撫や脱出をはかる装置の敷設がなされていくことの指摘などである。一見、難解な著者自身の論理のように思われるが、指摘は具体的で、敦成親王生誕前後の記事、一条帝の行幸を迎える土御門殿の条などを例証とする論述は、説得性に富んでいる。説かれるごとく、確かにこの日記の理解は一筋縄ではいかない。ために、解明のさまざまに試みがなされてよい。ここに示された著者の論理は、手応えを感じさせる有効な一つの手立てであること、間違いあるまい。

興味深く論じる『紫式部集』の物の怪憑依の歌と『源氏物語』夕顔巻の霊物に関する二論を挟んで展開される『更級日記』の三論も、叙述の細部に分け入って表現の構造と論理を読み解き、作品の本質に迫るものであり、説得性を備えている。「VI 更級日記の海道」は上洛の記を考察対象とし、これは単なる紀行ではなく、鄙人である〈少女〉の憧憬してやまない都への旅という秩序化されたものと説き、書くという行為を通じての旅の構築であるという特質を明らかにして有益である。「VII 更級日記における信仰の位相」は、物語と信仰を対置しながらも、結局は信仰というレベルとは根源的に弁別されねばならない作品の内実であることを指摘して、有効

にして興深い。「VIII 更級日記の終末―最終歌の表象をめぐって―」は、他者の詠が作品の末尾に位置しているとの、一部にある指摘を取り上げて、その失当であることを論じ、手堅い検証を通して明快に誤りを正している。諾われるべき説述である。

このようにして、『紫式部日記』の場合でもそうであったが、ここでもこれらの論述は、『更級日記』とはいかなる性格の作品なのかと、読む者をして一層の深みに誘導せしめる役割を発揮していて、その意義は大きい。

続く『讃岐典侍日記』の四論にも、きわめて魅力的な論述の展開がみられる。「IX 讃岐典侍日記における人物の位置」は、この日記に登場する他者はすべて個性を欠落させられて、作者の長子を好意的に包み一体化する記号として存在していることを論じ、本日記の特殊な在りようを鋭く指摘する。続く「X 讃岐典侍日記の服飾への視点」は、服飾に関する記述箇所を具に点検し、作者には服飾への格別な関心がなかったことを結論づけている。このことも本日記の性格を側面から明かすこととなる。「XI 日記の歌語り性―讃岐典侍日記と弁内侍日記の場合―」は、歌語り性の濃厚な『弁内侍日記』と比較して、作品に含まれる歌そのものが少ない本日記の歌語り性の乏しさを指摘する。「XII 讃岐典侍―死を見つめる―」は、作者は「死」を凝視しているかに見えて、実はそうではなくして、それは堀河帝への独自の愛執の眼差しにほかなら

ないことを具体的に論証し、本日記の内実を明らかにする。巻末に位置する「Ⅻ 讃岐典侍という存在(講演)」は、講演であるだけに、著者ならではの自在にして絶妙な語りにより、作者長子の情念に視点を定めて『讃岐典侍日記』の特色と魅力を説くもので、これも大変興味深い。

総じて著者の関心は、作品の表現内部に深く向けられ、表現行為の本質を不断に問い、作品の特質の把握に鋭く迫るもので、すこぶる有効性を発揮していること、繰り返し返すまでもない。そこに本書の本領の発露があり、意義が存するのである。

以上、はなはだ意を尽くし得ないものとなったが、終わりに一言願望を添えさせていただくならば、今後における『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』等にも視野を及ぼした、平安日記の全体像に及ぶ論の展開である。そのことを期して待つこととして、蕪雑な評の筆を擱くこととする。(二〇〇三年九月二十五日刊、A5判二一八頁、定価五五〇〇円、笠間書院)